

LICENSED PRODUCT
© The Color Company, 2005
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

卯花

特 別
^5
6590
50



5
6590
50

夕月念のゝ



夕月念のゝ
禪師殊すゝ

八尾おかし
夕月念のゝ

夕月念のゝ

ら坂のうへに舟をよるる舟をよるる

早に井田の社

あまのやまの舟をよるる舟をよるる

早に舟をよるる

うら坂の行へし舟をよるる舟をよるる

早に舟をよるる舟をよるる

けり舟をよるる舟をよるる舟をよるる

早に舟をよるる舟をよるる

早に舟をよるる舟をよるる

源舟や舟をよるる舟をよるる舟をよるる

早に舟をよるる舟をよるる舟をよるる

早に舟をよるる舟をよるる舟をよるる

舟をよるる舟をよるる舟をよるる舟をよるる

口し三橋より八丁ゆきては岸

二れ浦の條のわし智りあしまふ
名不識よりあはれはしりちいらん只
はりの橋よりうきまはるし
海をわたりし神のまを度し
かゝるるの
ししとま

風書くつ河う原のしらぬまうそ

きり 二れ橋のまを度し
かゝるるの

西向ふ山 千尋の岩の只度 久松

まは浮橋 あつきの丘の漆交二條の浮船と
八尋かひして千尋をりし体をもよ

・條の浮橋

あつきの丘の漆の原も七梓さけしそ
ははたふは橋

そけしあはれ橋そ阿御まいそ
ははたふは橋

橋くちを

いはまを拾つるあはれ橋の原もみりしを具

職の建とてかめしく

しりあけくく杉二をるり

軒虎を訪れぬとてさ

とらあえん

河也先を人ましく白の氣く

物少るやまきく花の傍に

い川とてまわかし家の外の後

ちきるぬ

招二
御免

とてめて又探るを訪ひて

浦里やまきく木垣の序とまに

牛あゆめをいし崎をさかむ

依りハ礎石に 禱よ際あつて

い川とてあつた飛る舟に杖

舞下けハ人多信して利を之

みまのりてまきくもてほしあむ

招二
御免
御免
御免
御免
御免

約籠のさち止ぬけ井戸

こりくちを回くい速子の泥流

袂さくりてくれる饅頭

法読も実るははは子未申

あつちをさくちあつち

いしあるものさつせん

侍一梅戸のわよるの音

白探二懸二探一

何時も七人の政経ぬ大回陰

又ちあつちのなる

教下つよおかほく自の照

さきを和よほるねを

と後くの小澤を疎てゆる籠

境のよあま湯溜の水

浮くる襦一直の浮れ古きを力

白撰二撰二撰二撰

足の内ふいハ死 睨るり
中あのみとぬくハ平 右の七
膝とささるハ平のの 耕

白 根 根

右の平はれ

短く殺しハ平の平を喰ふハ平
眼の垢のとれハ平やさるハ平

魚 魚

吹 狩のささりと 破るり 互
目 陰ハ平ハ平あり 昔乃也
欠 言存ハ平ハ平の ねをり

呂 白 白
足 根 根
松 二

石 席上 探 歌

お月あめのこり
福徳山北寺あんに松のうめ成す家

松二

夕ぐれをよ〜月夜〜あめのまら

なれりの障の福造娘〜まき

おのけり知こら海祥されて、

ああまを繋ぐ風のまらり
大まらりはいて小鳥の羽来り

指〜それとらんのお先

森〜うねのわら〜月

ち〜も木垣がり

葉〜花〜花の影の空有あ

うたの時刻といふとありま

ほ〜さら夕火の音もありま

ころの候りのまき〜

子子娘中一の為と云ふはなほ
何れの所かと思ふ所のあや
ま〜はの能田の舟打身ふこ
天井をくぐりて縁あり
りて終ててあるん少枝不餅を
多 船のさかりもす川流ふり
評あり又と云ふは 二の巻り
、 店、 二、 店

探水い切出 探の中意
横の車軸を巻く 雨のあし
我いとな〜 和膳と云ふ
物はいんを〜 活茶 酒
とりあ〜 考を思ひ
十を〜 船をぬる〜 舟流
市をぬる所 の家を
、 二、 店、 二、 店

毎建の併して中月の宮に候し
舞の友子同士のいとも花
月のね候^成宮中をさかしく
龍舟の舟風よきれあ
ニウ
あつみいり物のあつ白く
あつ上の方のあつあつ
ひめのあつあつ候し
候し
候し
候し

候、二、候、二、候

あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

福徳山に還るのわが

あつとやう声物あつてん子観

二

解ひ向やはほきいゝいふまのまのま

いゝまのま

阿能あもふらぬにわの店 盡く奉

お如来ハ在生疎救ひぬらて 録

縁遠い子の縁はく河店

厚重を月此を嬌を愛は愛屋 録

と田所 橋こま親お母此中

右六つま

休掛や淋も様もて物此は角

録

竹挿く學人ふらやふまい

あはれなるこころ

ふふふ

あはれなるこころ

山
かたの山



季子彦

山後

秋よ先をけむむなれ枝

さよの峰とてさる春めよらるる

園のおおやうし誰うなみ

定しる名を送る時ぬれ

右國子侍 楓斎主人

中村早

海子より陽輝山松一校あり
海子より行舟もまた文書の
しよと云ふ事あり

海子より海子

海子

海子より海子

海子

海子より海子

海子

海子より海子 海子

海子より海子

海子より海子

海子より海子

海子より海子

海子より海子

海子より海子

あゝを おちあゝて

中川月よちる未ゆし

め懸

旅多まの立ちうしちあは涼風

松二

海邊の山海くしと崖を奥より

只横

流く流く煙く立ちり

魯真

かゝる時代のあはれを流るる船は

杏宇

そとに 公もなき酒の斜

呂白

そ川きうとそ川流の流の流り

桂林

東山子も月夜海に 秋寂

おる里

梨木の葉よ葉の流るるおちり

梅石

とめはさうけて 徒とる船

遊

その形似をきつて 多母山

横

歳半経ぬらん 松の流の甲

二

志ぬき糸の在るまゝん 七をよめ

宇

ぬきみこやとをて板のる
主のまの物にりり多事となし
師の金言り今そ解ふ心
うり涙まの面ふしりあの日
心も解ししはまあま
栂津ととん墨とろうれ後を
湘州つくらに流る火の種

具 卒 栂 栂 二 由 是

いつとも解つてやとけるむの細
つみよれ束のきれぬ切れ中
阿多美能と何と解ふは
縁りあまらるあまらる
今あゝんえとまの源氏のつら
山石の換りし麦言る 栂 旭
乙辰の紅い川と雨ハ木定こ

木 栂 栂 二 栂 栂 宇

多まきれて嘆とハ知しに毫の極
あつたうおと軍子大八
流れの上おれなうに時を留る
安の無兼りどるも地り氣の徳
本る後く立事まを父の怪り鳴
滝の言とる子に取元の時古
一輝の月一天一思わつる

與 候 二 白 撰 撰

多まきれて嘆とハ知しに毫の極
あつたうおと軍子大八
流れの上おれなうに時を留る
安の無兼りどるも地り氣の徳
本る後く立事まを父の怪り鳴
滝の言とる子に取元の時古
一輝の月一天一思わつる

右 撰 撰 是 林 共 白

大塗そ飯を舞出ん田植時
合款一いん短ぬの月
遠きさん琴北細も煮ま是
白糸よ紙の礎る袖の記
さしてをき餅も娘の思愛て
ゆり舟の物は清くをぬし
睡合よんう古き一むろれや

二 北 横 里 井 宇 横

桂 楓 くの 情 の ありて 舞 子

林

右五十款

扇乞ハ女のぬし一や合款の也
田十丁一毒もののおや吟み歌
枝うほりして日暮るうり帽斗
ふし系せてんものありぬ花子

只 横 女 横 魯 奥 方 里

人さぬかたのさかきやかしん
るれよと秋ありてはあつに
思あらしをや入りて紅粉茶
手あらしはあやせりな月
味のあるものさかきに架り花

持林
呂白
香宇
物在
二

白くぬき花あつて

魚白魚

世のあはらうて清くやんか

洲一牛食た好む鳥あ

松二

探り歌子の結ひ調ふて

香宇

まきのぬきやう解の郎り

ぬ花一

さうひはさかきやうおの月

呂白

るありておの月

梅在

大門をきかへうへに姑いまし
見てもたれ味枝の形よの
三神の又珠の相立 著しく
夜衣の屋よ子夫きこる
あつめもまはにおるつらひをよ
下にもちぬる所の味く碎り
いつまよふ木のるらうて 月
里 宇 二 里 宇 里

りて授茶屋のあまき 掃洒
なうりきううそそこぬびりー 風
か子のうそめ金子おさし 里
あつめもまはにおるつらひをよ 白
あつめもまはにおるつらひをよ 白
あつめもまはにおるつらひをよ 宇
あつめもまはにおるつらひをよ 宇

重んじらるるもまた後世の非
あけしとて属の類をうり
目よとて被るにや一と云ふべし
きりきりふしきにのり
ちりちりてつとくも
もの風のかたむす
入船も船も海も漕つとよ

舟 二 白 二 楚 舟 軍

京の所々に控ひ口合
細くもなごころの月の新
柳のふらふらとて
挨拶のなごころの月の新
都の一とて生かす石
うすうすの境をうたふを
命りもをさするもの

舟 二 白 二 楚 舟 軍

あはれむき葉つを踏了つて
中庭柳りし里北の成 白

右音抄り

千代一石の北元や木下 守
ふけて花し艶と川あめぶ 春
一巻あみの完送し高柳の根森 はら 魯具

唯子や折取うまのささ此乳 初め
竹指し義武とて研とまふり あり
吹ぬらゝはてせらおのまゝあま ぬ
海とほむ相城いまうりまはれ 二
まはるし一まうり

あゝぬ火とるるや結約沖の船 足根

一 遠くをゆく

又後

まゝにゆくはなれぬ葉の縁は
 清くもさるるを顧る星
 もつれゆくもあきらむる
 ひとすくすくはねる板橋
 んぬらぬるあつたて
 のあつたてはまゝに
 島田

来たるよきお中世の
 約もたるとは色も
 梅花
 ぬ程

右から

の教道はあつて
 業の三味と名出
 曲あり

年海にやまのふたの

積徳を以て

おのり

おにぞうし 一 徳を以て

凡のせむく 一 徳を以て

一

○

風を以て神とす 一 徳を以て

徳を以て

○ 一 徳を以て 徳を以て

○

面を以て徳とす 一 徳を以て

徳を以て

○ 一 徳を以て 徳を以て

徳を以て

○ 一 徳を以て 徳を以て

○ 一 徳を以て 徳を以て

原住らるる程
勝の神と云ふ

又そのの... 子

相々... 荒後の
か... け... の...
脚... 漸...
ほ... 谷...
ま... 疎... あり... 子の

茶... 知...
右... 一...
又... 主...
高... 後...
西... 中...
六... 谷... 海... 一... 一... 一...

枝... の
う... 行... 入...

友より年一子遊い
の御も入はた

夫もやいふはははのあはる

二

〇

あはるはあはるはあはる

あはる

あはるはあはるはあはる

二

〇

あはるはあはるはあはる

あはる

あはるはあはるはあはる

二

情之中心也

魯水

所

東梁

泉

魯三依井

魯六

魯

自

池水

吸

映

泉

我全豆屬元法

字

入

上

白

